

<論文題目>

## ことばの意味空間から捉えた異文化理解に関する一考察

一日本語基本動詞「とる」と中国語基本動詞「取(qu)」「拿(na)」を事例として一

指導教授 森川 直

論文指導教員 松田 文子

岡山大学大学院教育学研究科 学校教育学専攻 20-003 黄 一君

### 序章

#### 0.1 本研究の目的

国際化・グローバル化の進展が著しい現代において異文化との接触は増えており、現代社会において異文化理解は不可欠のものとなっている。「文化」とは、言語、宗教、風俗・習慣、衣・食、教育、制度など、さまざまな要素の総体として捉えられるが、これらの要素はすべて各文化によって異なっている。本研究では、異文化理解研究<sup>1</sup>の一環として、文化の一構成要素である言語に着目する。

ところで言語は、「言語と文化」、「言語や文化」という呼び方が示すように、一般的には、文化とは切り離して考えられる傾向にある。しかしながら、ソシュール以降、「言語はそれ自身文化である」とする捉え方が一般的である。言語は単にわれわれの「思考や感情の表現の手段」というようなものではなく、世界（現象・事態・状況）を切り分ける機能、すなわち「分節機能」を担っており、その切り分け方（＝分節の仕方）が言語文化によって異なっている（丸山, 2001 : 13）。

本研究では、異文化を理解する一観点としてこの分節の仕方の差異に着目し、あることばで分節される意味世界を「ことばの意味空間」と呼ぶことにする。では、現行の辞典の記述などを通して個々の用例に触れるだけで、当該のことばで分節される意味空間を一般化して理解することができるだろうか。本研究では、異文化理解研究の新しい一つの切り口として「ことばの意味空間」に着目し、ことばの意味空間をどのように記述・説明すれば分かりやすいかを探ることを目的とする。

#### 0.2 異文化理解研究における本研究の立場

佐藤 (1999:29) は、異文化理解に関する研究を行う際、二つの文化の違いを強調する「比較的アプローチ」、その相互作用を強調する「相互作用的アプローチ」があると指摘した。本研究では、「言語」を対象とするため、二つの文化（言語）の違いを強調する「比較的ア

<sup>1</sup> 「異文化理解」は、「異文化間教育」の研究領域の一つとして位置づけられ（佐藤, 1999:10-19）、他に「異文化適応」「アイデンティティ」「異文化間コミュニケーション」「異文化間カウンセリング」などもその研究領域として挙げられている。

アプローチ」をとることとする。

### 0.3 本研究の考察対象

本研究では「基本動詞」を考察対象とする。具体事例として、基本動詞の中でも特に多義性の高い日本語動詞「とる」<sup>2</sup>を取り上げ、中国語の対訳語「取(qu)」「拿(na)」との意味空間のずれをどう記述すれば分かりやすいかについて考察することを試みる。

### 0.4 本研究の構成

#### 序章

- 0.1 本研究の目的
- 0.2 異文化理解研究における本研究の立場
- 0.3 本研究の考察対象
- 0.4 本研究の構成
- 0.5 用語の定義

#### 第1章 本研究の理論的背景——言語と現実世界の関係——

- 1.1 はじめに
- 1.2 素朴な言語観——「言語命名論」(ラベリング) ——
- 1.3 ソシユール言語学の言語観——「言語記号論」 ——
  - 1.3.1 「言語記号論」の前提
  - 1.3.2 「言語記号論」における捉え方
  - 1.3.3 「言語記号論」の恣意性
- 1.4 認知言語学の言語観

#### 第2章 「ことばの意味空間」の説明理論と分析方法

- 2.1 はじめに
- 2.2 現行の国語辞典の説明の仕方
- 2.3 意味空間分析の説明理論——「認知意味論」 ——
  - 3.3.1 コア・アプローチ——「コア図式論」 ——
  - 3.3.2 コア・アプローチによる記述方法

#### 第3章 コア・アプローチ(「コア図式論」)を用いた「とる」の意味空間分析

- 3.1 はじめに
- 3.2 日本語動詞「とる」の意味
  - 3.2.1 前提
  - 3.2.2 国広(1997)の「とる」の分析
  - 3.2.3 松田(2006a)の「とる」の分析
  - 3.2.4 研究成果と異文化理解の観点からみた残された課題
- 3.3 本研究の研究課題

#### 第4章 コア・アプローチを用いた「とる」の対訳語「取(qu)」「拿(na)」の意味空間分析

- 4.1 はじめに
- 4.2 分析データ
- 4.3 中国語動詞「取(qu)」の意味(コア図式)
  - 4.3.1 辞書の記述
  - 4.3.2 「取(qu)」の意味(コア図式)
- 4.4 中国語動詞「拿(na)」の意味(コア図式)
  - 4.4.1 辞書の記述
  - 4.4.2 「拿(na)」の意味(コア図式)

---

<sup>2</sup> 『大辞林 第三版』によると、「とる」の項目には大区分として10用法が並び、小区分は73項目に及ぶ。

## 終章 総合的考察

### 5.1 研究成果のまとめ

### 5.2 考察

### 5.3 異文化理解教育への示唆と今後の課題

## 参考文献

## 第1章 本研究の理論的背景——言語と現実世界の関係——

本研究ではことばを対象とするが、ことばはどのようなものとして捉えられてきたのであろうか。本章では、研究の理論的背景として、言語と現実世界の関係の捉え方について概観し、「言語は文化そのものである」という点を確認するとともに、言語間のことばの意味空間比較は、異文化理解研究の新しい一つの切り口であることを述べた。

われわれは、ことばとはモノに貼り付けられたラベルあるいは名前だと思ふことが多い。このような考えは、一般的には「言語命名論」あるいは「言語衣裳観」と呼ばれている。しかしソシュールは、この「言語命名論」を否定して、「ことば自体が世界（事物）を切り分けている」とする「言語の対象創出性」の考えを提唱した。この考えはいわゆる「言語記号論」と呼ばれるものである。

「言語記号論」において、ソシュールは言語記号をシニフィアン（能記、記号表現）とシニフィエ（所記、記号内容）の二つの面を兼ね備えたものと規定する。シニフィアンはフランス語の動詞 *signifier*（意味する）の現在分詞で「意味しているもの」「表しているもの」を指し、シニフィエは同じ動詞の過去分詞で「意味されているもの」「表されているもの」を指す。ここでは、シニフィアンを「表現」、シニフィエを「意味」と訳す。

「言語記号論」では、以下の引用（丸山, 1981:120）に見られるように、「ことば（表現＋意味）が世界（事物）を切り分けている」（「言語の対象創出性」）とする考えをとる。

ソシュール以前は、コトバは表現でしかなく、既に言語以前からカテゴリー化されている事物や、言語以前から存在する純粹概念を指し示す道具と考えられていたが、ソシュール以降の考え方では、コトバは表現であると同時に意味であり、これが逆に、それ自体は混沌たるカオスの如き連続体に反映して、現実を非連続化し（切り分け）、概念化することになる（丸山 1981:120）。

一つの社会制度であることばによる切り分け方の違いが（強弱は別として）人々の世界の捉え方、ものの見方を規定しているとすると、ことばによる切り分け方の理解は、「異文化理解」そのものであることが分かる。つまり、言語間のことばの意味空間比較は、異文化理解研究の新しい一つの切り口となる。

それでは、言語文化によって異なることばの意味空間は、どのようにして比較すればよいだろうか。ここで問題となるのは「表現（シニフィアン）」と「意味・概念（シニフィエ）」

の関係である。一つのことばは多義となり、表現（シニフィアン）と意味・概念（シニフィエ）の関係も単純明快なものではなくなるため、その意味空間の記述は単純ではない。そこで、続く第2章では、「ことばの意味空間」はどのように説明できるかに関する説明理論と分析方法について述べる。

## 第2章 「ことばの意味空間」の説明理論と分析方法

本研究では前章で述べたソシュールに従って、ことば（単語）を「表現（シニフィエ）+意味・概念（シニフィエ）」の結合体であると考え、一つの表現に対する意味・概念は、抽象度の異なるさまざまなレベルの意味・概念の錯綜体であることから、ことばの意味空間を記述することは方法論上、難しかった。本章では、認知意味論による意味空間分析の一つの立場であるコア・アプローチの考え方を概観し、本研究の記述の枠組みとしてコア・アプローチを用いることを述べた。

コアとは、文脈情報を省いた「脱文脈的意味」のことであり、語義は、文脈上で解釈される状況に合ったことばの意味である。例えば「とる」は多様な語義を持つが、それは「XがYをとる」のようにx値とy値が入って実現するものである。一方、コアは、x値とy値を省いた多義全体を包含するような共通の意味である。言い換えれば、当該語の「意味空間」を統御するものは「コア」だということになる。

コアを引き出す具体的な手順として、研究者はまず、辞典の記述によって切り分けられたさまざまな用法とそのイメージを分析し、それを統合していくことによってコア X を仮想し（図1, 左側）、それをコア図式として提示する。次に、文脈を加えることによって実現する各用法のイメージをそのコア図式のバリエーション（以下、イメージ図式）として絵描き、各用法とコアとの類似性を示して、「一つの形（=ことば）」には一つのコアが作用していることを示していく（図1 参照）。

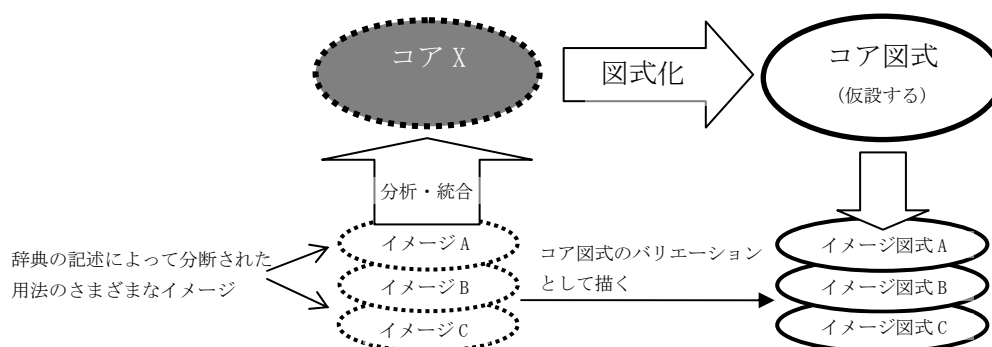


図1 研究者によるコア図式の仮設とイメージ図式（松田・白石, 2007）

### 第3章 コア・アプローチ（「コア図式論」）を用いた「とる」の意味空間分析

本章では、本研究の考察対象である日本語動詞「とる」の分析（国広, 1997；松田, 2006a）について概観した。

松田（2006a）は、国語辞典に記載された「とる」を10用法およびその小区分73項目をデータとし、辞典の記述によって切り分けられたさまざまな用法とそのイメージの分析・統合を繰り返すことによって「とる」のコアおよびコア図式を以下のように捉えている。

「とる」＝対象を、元あるところから、手中（＝主体の扱えるところ）に移し、意図に適うように扱う（操作・処理など）こと。

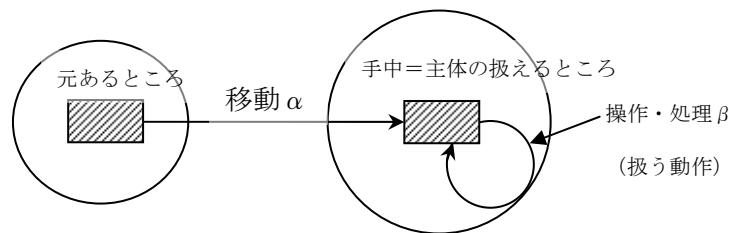


図2 「とる」のコア図式

「とる」は「元あるところ」から対象を移動させ、それを手中に移し、さらにそれを意図に適うように扱うこともあるという行程を表すとして、図2のようなコア図式を仮設した。コア図式の「手中」は、主体が「対象を扱えるところ/利用できる場所」という意味の「手中」である。「操作・処理β」は、対象を「状況に適うように処理する/調整する/操る」などの「扱う」動作、あるいは「活用する/利用する」というような言葉で表される行為を総括して示すものである。

コア図式は抽象度の高い概念図であるため、ものの見え方が光の当たり方によって異なるように、語義のイメージはそれぞれ異なるように見えるが、それはコア図式の見え方の違いであるというのがコア・アプローチの記述の前提である。松田は、「とる」の多義用法を上記のコア図式の「元あるところ」、「移動α」、「手中」、「操作・処理β」のいずれかが「焦点化」された図式として統一的に説明している。例えば、元あるところから対象を別のところに移すという意味を表す「帽子をとって、挨拶する」、「箱の蓋をとって、中身を確認する」などは、「元あるところから対象がなくなる」という「元あるところ」の部分焦点化した（＝認知的力点が置かれた）図式として表すことができ、この場合「手中」および「操作・処理β」の部分には認知的焦点は置かれない。

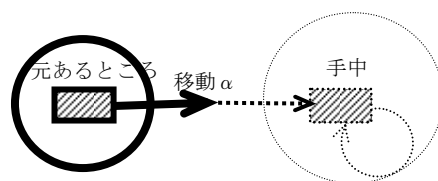


図3 イメージ図式1

また「父の書棚から本をとった」「川で魚をとった」「花見の席をとりにいこう」などは、対象を単に手中にする・わがものにするだけでなく、「何らかの処理をするものとして手中にする」という認知が働いた用法である。「狩猟、漁、採集」などには元々この意図があり、「とる」の典型的な用法であるともいえる。これらの用例では「元あるところから手中へ移す」だけでなく、その後、利用、活用すること、すなわち「操作・処理 $\beta$ 」が含意される。

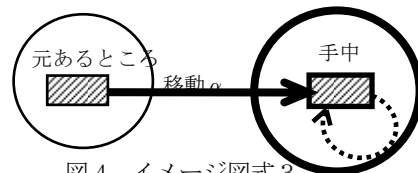


図4 イメージ図式3 操作・処理 $\beta$  (含意)

さらに「とる」には、「対象を手を持って扱うこと」を表す「舵・ハンドル・手綱をとる」、着物の袂をとる」や「対象をその手で運用すること」を表す「事務・政務をとる、指揮をとる」などの用法があるが、これらは対象を扱えるところである手中に心理的移動をさせた後、それを主体の意図・状況に適うように扱うという部分に認知的焦点が置かれた用法であり、これらの用法はコア図式の「操作・処理 $\beta$ 」の部分焦点化した図式として表すことができる。

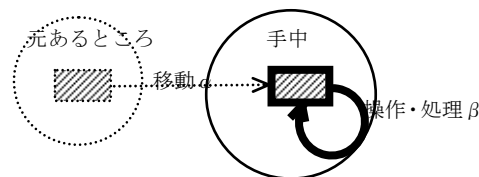


図5 イメージ図式4

このように、「とる」のさまざまな用法をコア図式のいずれかの部分に認知的焦点を置いた表現であると捉えると、「とる」の意味空間は一つのイメージに取りまとめて理解することが可能になる。

#### 第4章 コア・アプローチを用いた「とる」の対訳語「取(qu)」「拿(na)」の意味空間分析

前章を踏まえ、本章では松田(2006a)に学びながら、「とる」の対訳語「取(qu)」と「拿(na)」の意味空間の分析を試みた。

##### 4.1 「取(qu)」の分析

「取(qu)」の分析には、『現代汉语大词典』を中心として5辞典から43例文を採用し、その例文を踏まえながら、「取(qu)」の使えない例文やその類義語とのニュアンスの差異を比較した。その結果、「取(qu)」は「対象は必ず手中に移せる状況にある」という点と「対象を手中に移す」という点の二つが前提になって用いられると仮定できる。また「取(qu)」は、対象を手中に移すだけでなく、移した後にその対象を利用・活用することが含意されているとも仮定できる。そこで以上を踏まえ、「取(qu)」のコアおよびコア図式を図3のように表した。

「取(qu)」＝対象を、必ず手中に移せるところから、利用・活用するために自分のところに移すこと。

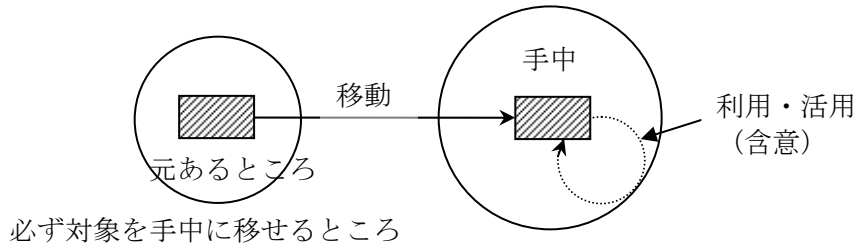


図6 「取(qu)」のコア図式

このコアおよびコア図式をもとに、「取(qu)」のさまざまな用法をコア図式の「元々自分のものである対象を身近なところに移す」と「非わがものである対象をわがものにする」のいずれかが強調された図式として統一的に説明した。例えば、別のところにある<自分のもの>を身近なところに移すことを表す「我去銀行取点钱(わたしは銀行へお金を少し下ろしに行く)」、「到洗衣店去取衣服(クリーニング店に服を取りに行く)」の「お金」は銀行に預けた自分のお金であり、「服」はクリーニング店に預けた自分の服である。このような例文は、対象を必ず主体側に移せるところから移す部分が強調された図式として表すことができる。

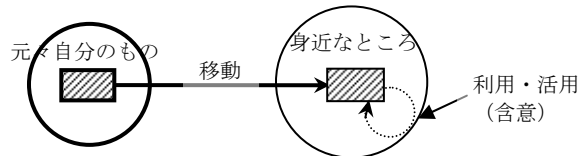


図7 イメージ図式1

また、<非わがもの>である対象をわがものにすることを表す「到先进单位取经(先進的な部門へ行って良い経験をしてくる)」、「给孩子取个名字(子どもに名前をつける)」には、「他の部門の良い経験」を学びに行く前に、その部門の許可を得ているため、その「いい経験」は必ず持って帰れるものであり、わがものにすることができる。また「名前」は、いくつかの漢字の組み合わせを考えることやそれを選びとることより、わが子の名前としてわがものにする。このような例文は、自分のところに対象を移す部分が強調された図式として表すことができる。

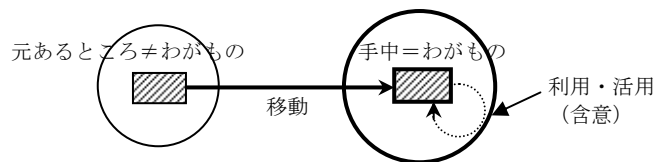


図8 イメージ図式2

このように、「取(qu)」のさまざまな用法をコア図式のいずれかの部分が強調された表現であると捉えると、「取(qu)」の意味空間は一つのイメージに取りまとめて理解することが可能になる。

## 4.2 「拿(na)」の分析

「拿(na)」の分析は「取(qu)」の分析と同じように、5辞典から42例文を取りあげ、それらの例文を踏まえながら、「拿(na)」とその類義語とのニュアンスの差異を比較した。結果として、「拿(na)」は手の動作(心理的な手を含む)で対象物を元あるところから離して、手の中(心理的な手を含む)に移すこととして説明できることが分かった。「心理的な手の中」の場合は、対象の制御権を心理的な手の中に握り持つというニュアンスになる。これらを取りまとめると、「拿(na)」のコア及びコア図式は図4のように仮定できる。

「拿(na)」=対象を、元あるところから、手の中に握り持つこと。

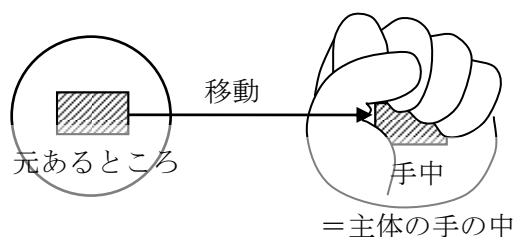


図9 「拿(na)」のコア図式

このコアおよびコア図式をもとに、「拿(na)」のさまざまな用法を、「対象を物理的な手の中に握り持つこと」か「対象の制御権を心理的な手の中に握り持つこと」のいずれかとして統一的に説明した。例えば、対象を元のところから主体の物理的な手の中に握り持つことを表す「把窗台上的鞋拿进去吧(窓台の上の靴をとりこみなさい)」、「从衣袋里拿出自己的钥匙(ポケットから自分のかぎを取り出した)」「这个我来拿(これは私が持ちましょう)」などは、対象を物理的な手の中に移した図式として表すことができる。

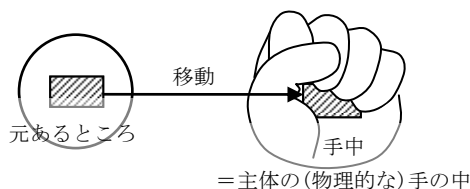


図10 イメージ図式1

また、対象の制御権を心理的な手の中に握り持つことを表す「他总爱拿人,你最好留点神(彼はとかく人の弱みに付け込むから注意したほうがよい)」、「这个部门你拿得住吗?(この部門を君は管理していけるか)」、「苏联红军拿下了柏林(ソ連赤軍はベルリンを攻め落とす)」などは、対象を心理的な手の中に移した図式として表すことができる。この場合手の中に移した対象の制御権を主体が握ったという意味になる。

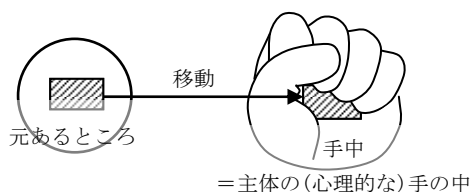


図11 イメージ図式2

このように、「拿(na)」のさまざまな用法をコア図式で捉えると、「拿(na)」の意味空間



は一つのイメージに取りまとめて理解することが可能になる。

## 終章 総合的考察

### 5.1 研究成果のまとめ

以上から、「とる」「取(qu)」「拿(na)」の違いは次のように説明できる。

「とる」と「取(qu)」は、対象を自分のところに移すという点は同じである。また対象を移した後に意図・状況に合うように扱うという意味を含意するという点でも同じである。（「とる」の例：本をとる、魚をとる、花見の席をとる、新人をとる、客の手をとるなど。「取(qu)」の例：取钱(お金を下ろす)、取经(良い経験を学ぶ)、取名(名前をつける)など。)しかし、「とる」と違って「取(qu)」は、移動元が「必ず主体側に移せるところ」というように限定されている。

「とる」と「拿(na)」は、移動元が限定されないという点では同じだが、「とる」は対象を自分側に移した後で利用・活用することが含意されるだけでなく、対象を意図に合うように扱うこと（動作を含む）までも表現する（例：舵をとる、バランスをとる、リズムをとる）。これに対し、「拿(na)」は主体の手の中に移すことしか表さない。

### 5.2 考察

本研究の目的に照らし合わせて、いくつか事例を挙げながら日本語と中国語では、事態の捉え方が異なっている点から考察した。ここでは、一つの事例を挙げる。

例：「魚をとる」と「捕鱼(buyu)」「取鱼(quyu)」「拿鱼(nayu)」

「魚をとる」という日本語に対しては、中国語では「捕鱼」「取鱼」「拿鱼」が対応できる。中国語では、海や川で生きている魚をとる場合には「捕鱼」と表現し、「取鱼」は使わない。それは、海や川で生きている魚はとれるかどうかは保証できないためである。「取(qu)」を用いると、捕まえてバケツや冷蔵庫（＝必ず手に入れることができる場所）に置いてある魚を利用するために、身近なところに移すという意味になる。すなわちこの魚は元々自分の魚だったり、人のものであっても許可を得て手に入れることのできる魚である。「対象を必ず手中に移せるところから、利用・活用するために自分のところに移すこと」であるという「取(qu)」のコアを通すことによって、このような「取鱼」の意味は明確になる。

また「拿(na)」を用いると、手で持てる魚を手の中に握り持つという意味になる。それは、「拿(na)」のコアは、「対象を、元あるところから、手の中に握り持つこと」であるためである。「拿(na)」のコアは、元あるところが「取(qu)」のように限定されていないため、「拿鱼」における魚は自分の魚の場合もあるし、他人の魚の場合もある。また対象を手の中に握り持つことだけを表し、利用・活用することまでは意図しないため、その魚を捨てることも可能である。

このように、コアで意味空間を包括的に理解することにより、対訳だけでは分かりにくかった日本語と中国語という二つの言語文化の事態の捉え方の違いがよりよく分かるようになる。

### 5.3 異文化理解教育への示唆と今後の課題

それでは、本研究の成果は異文化理解教育にどのように示唆できるだろうか。

近年、外国語教育は国際理解教育・異文化理解教育との関連から述べられるようになってきた（溝上他, 2009）。例えば丸山（2001:16-23）は、この点について次のように述べている。

もし、言語を学ぶ意義が道具・手段に限られるとしたら、それはさびしいことである。・・・(中略)・・・ことばは、それが話されている社会にのみ共通な、経験の固有の概念化・構造化であって、外国語を学ぶということは、すでに知っている事物や概念のあたらしい名前を知るのではなく、今までとは全く異なった分析や新しいカテゴリー化の新しい視点を獲得することである。言語がそれ自身文化であり、例えば中国語を学ぶということは、全く新しいものの見方を身に着けること、すなわち日本語を通して知っている世界を別の観点から読解・把握することである。

このような状況のもと、本研究の成果は外国語語彙教育において、今までの対訳とは異なる異文化理解の観点を取り入れた語彙教育の可能性につながると考える。例えば、第4章で述べた「取(qu)」を例に取れば、中国語では「クリーニングした服をとってくる」と同じように「銀行でお金を下ろす/引き出す」ことも「取(qu)」で表す。それはどちらも必ず手の中に移せるところから身近なところに対象を移す>という意識で事態を捉えるためであり、日本語母語話者はコアを利用することによって、日本語訳にとらわれることなくこれらの用法・用例が理解できるようになるのではないだろうか。

このように、コアを介して概念レベルで学習をすることにより、他の言語文化における事態の把握の仕方を知るだけでなく、自言語文化のそれをも知ることができる可能性が拓ける。しかしながら今回は、「とる」とその対訳語である「取(qu)」「拿(na)」の分析にとどまっている。今後、他の基本動詞についても分析を進めていく必要がある。

### 参考文献

- 安藤貞雄（1986）『英語の理論・日本語の理論』大修館書店  
池上嘉彦（1978）『意味の世界——現代言語学から視る』NHKブックス  
エドワード・サピア（1998）『言語——ことばの研究序説』（安藤貞雄訳）岩波書店  
大橋洋一（2006）『文化とは何か』松柏社  
河上誓作（1996）『認知言語学の基礎』研究社出版

- 風間喜代三他 (1993) 『言語学』 東京大学出版会  
 国広哲弥 (1997) 『理想の国語辞典』 大修館書店  
 佐藤信夫 (1996) 『レトリックの意味論』 講談社  
 祖父江孝男 (1997) 「文化人類学の立場から」 『異文化間教育』 11号, 異文化間教育学会.  
 pp. 24-36.
- 田中茂範 (1987) 『基本動詞の意味論—コアとプロトタイプ—』 三友社出版  
 田中茂範 (1990) 『認知意味論—英語動詞の多義の構造—』 三友社出版  
 田中茂範 (1998) 『空間と移動の表現』 研究社出版  
 田中茂範 (2004) 「基本語の意味のとり方—基本動詞におけるコア理論の有効性—」 『日本語教育』 121号, pp. 3-13.  
 田中茂範 (2005) 『幼児から成人まで一貫した英語教育のための枠組み』 リーベル出版  
 田中茂範・深谷昌弘 (1998) 『<意味づけ論>の展開—情況編成・コトバ・会話—』 紀伊国屋書店  
 深谷昌弘・田中茂範 (1996) 『コトバの<意味づけ論>—日常言語の生の営み—』 紀伊国屋書店  
 松田文子 (2001) 「コア図式を用いた複合動詞後項「～こむ」の認知意味論的説明」 『日本語教育』 111号, pp. 16-25.  
 松田文子 (2004) 『日本語複合動詞の習得研究—認知意味論による意味分析を通して—』 ひつじ書房  
 松田文子・白石知代 (2004) 「多義動詞「とる」の意味—隣接語との差異に着目して—」 『人間文化論叢』 第7巻, pp. 509-419.  
 松田文子 (2006a) 「コア図式を用いた多義動詞「とる」の認知意味論的説明」 『日本語科学』 19号, 国立国語研究所. pp. 119-132.  
 松田文子・白石知代 (2006b) 「コア図式を用いた複合動詞習得支援のための基礎研究—「とり～」を事例として—」 『世界の日本語教育』 16号, pp. 35-51.  
 松田文子・白石知代 (2007) 『日本語複合動詞の習得研究：認知意味論を基盤とする日本語学習者習得支援への提案—コア図式を併記した学習辞典のための基礎研究—』 平成16年度～平成18年度 科学研究費補助金(基盤研究(C)) 研究成果報告書  
 初山洋介 (2002) 『認知意味論のしくみ』 研究社出版  
 丸山圭三郎 (1981) 『ソシュールの思想』 岩波書店  
 丸山圭三郎 (1983) 『ソシュールを読む』 岩波書店  
 丸山圭三郎 (2001) 『言葉とは何か』 夏目書房  
 溝上由紀・柴田昇 (2009) 「『異文化理解』と外国語教育——教養教育の一形態として——」 『愛知江南短期大学紀要』 38号, pp. 31-42.  
 森田良行 (1995) 『日本語の視点—ことばを創る日本人の発想—』 創拓社  
 山梨正明 (1995) 『認知文法論』 ひつじ書房  
 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』 くろしお出版  
 レイコフ, G & ジョンソン, M (1986) 『レトリックと人生』 (渡辺昇一・楠瀬淳三・下谷和幸 訳) 大修館書店

## 参考辞典

- 『Eゲイト英和辞典』 (2003) (田中茂範 編) ベネッセコーポレーション  
 『現代汉语大词典』 (2000) (現代汉语大词典編委会 編) 汉语大词典出版社  
 『現代汉语词典』 (1996) (中国社会科学院语言研究所词典编辑室 編) 商务印书馆  
 『大辞林 第三版』 (2006) (松村明 編) 三省堂書店  
 『中国語大辞典』 (1994) (香坂順一 編) 角川書店  
 『中国語動詞活用辞典』 (1993) (王硯農・焦ホウグウ・林芳 著) 東方書店  
 『日中辞典』 (1987) (北京对外経済貿易大学/北京商務印書館/小学館共同編集) 小学館